

支那の回回教に就て

遠藤 佐々喜

歐亞の兩大陸に跨り、世界の三大宗教の一として最優勢なる地歩を占めたる回回教は其地盤たる廣大なる未開地に於ける下層民族の多衆的且保守的なる宗教信仰の基礎の上に、新に教祖の劍影を偲ばしむべき政治的大運動即ち回教世界統一政策 (Pan-Islamism) の不言實行に於て所謂暗中の大飛躍を試みつゝあり。之が爲めに其盟主たるべき近東の土耳其帝國は極東の我日本帝國と隱約の間既に默契する所も無きにあらざる最近の證跡あり。是れ或意味に於ける亞細亞人對歐羅巴人の政治的自衛、歴史的復活、文化的返酬なれば、たとへ政治家或は宗教家ならぬ吾人學窮の徒といへども、必ずや多少の注意を拂はざるべからざる義務あるべし。

吾人が此見解を抱くに至れるより其日未だ淺く、從て一般回教に就て知る所も甚だ狹し。特に支那の

回教に就いては、事々しく之が研究など、稱するものを發表するの機未だ熟せず、目下漸く其研究材料蒐集の緒につきたるに過ぎざれども、我邦の東洋學者乃至一般讀書子の間に這般の回教研究頗る閑却せられたるを遺憾とするが故に、敢て平凡なる豫準研究の雜錄一篇を草し、以て同好の士を促し、併せて吾人管見の及ばざる大方先覺の誘掖を乞はんとす。

回教の異名、回回教、回教、清真教、天方教、石室教、花門教、小教等の異稱あり、回回教又單に回教といふは回紇又回鶻がもと信じたるより起れる名なりとするを通説とす、其他或は其教徒の讀經の際同々と身をゆすぶるより起れりとの俗説あり、又同の字口の中に口を書くを以て回教徒の主義たる不言實行を現はすものと附會する説もあり。清真の二字は蓋イスラムの義譯にして、イスラム即ち神に服従すといふアラビア語の原字義を採り、眞神に服従す

る清き教と譯したるものならむ、清きを好むは此教の特色なり。天方とは天山の南方に其教徒多きより起れりとする説もあれども、天方國といへば「古錫冲之地舊名天堂又名域」にして即ち今のアラビア半島地方を指すこと明なるを以て前説は當らず。石室

教とは例のカーバの石の寶殿より起り、小教とは儒教を大教と稱するに對す。花門の字義は未だ考えず、

回教徒異名 回回、回子、回人、花門等の稱ありて、皆異名同者なれども特に新疆省に於ては纏頭回及漢回の二種の異人種異風俗の回教徒あり。初め唐代にありて大食國人といへば則ちアラビア人にして元、明代以後天方國人と稱するものと異名同國人なり、共に純同教徒にして今の混血せる支那回教徒の祖先の名なり。又支那及塞外西域一帯の回教徒自身が自らムスルマン(Musliman)と現稱するは漢字穆民の字を當つ。

回教寺の異名 回同寺、清真寺、修清寺、唐明寺

淨覺寺、禮拜寺等の異名あり、今は禮拜寺及清真寺の名最も普通に行はる。其回同寺の名を除く外は皆勅賜の名なり。支那最古の回教寺たる廣東の懷聖寺も亦然り。

初來の年代 回教の初來と、回教徒の初來とは自ら別々に考へざるべからず。回教徒たるアラビア人の支那初來の年代は唐書に見ゆる永徽二年(651)を最も古しとすべきか。同書中一説に隋開皇年中(581-605)回教徒の一種族來朝の記事あり、今の支那回教徒間にも専ら此時を以て回教の初來と信するを常とすれども、馬哈默德^{マホメド}は陳隋より唐の世の初めまでの人なれば、隋の開皇年中に其教支那に入るといふこと素より怪むべきは今之を辯する迄もなく已に「西洋雜記」^{嘉永戊申}にすら已に之を正せり。茲に注意すべきは此開皇年説の出所を西洋人の論じたる諸書には皆大明一統志の記事を引き其誤を襲くもの亦多けれども實は唐書西域傳大食國の條下の末文一説と

して已に掲げられたるに氣付かざるが如し。支那回教徒の自作たる清眞釋疑補輯には隋書殊域志といふ書を引き、明に開皇七年(587)と記し、又廣東懷聖寺現存賽爾德寺記と題する碑銘には開皇六年と刻すれども皆妄説なり。尙懷聖寺内の碑碣には別に太宗貞觀元年(或二年)(627—8)回教宣傳の卒先者ツツカス廣東に初來し、同三年(633)歿したることの紀年ある漢文并アラビア文の各種類ある由なれども國民新聞三年四月十日號伊東博士廣東發見談是等も回教徒のかくの如く難有味をつくるための假設年代と見るべし。かくの如く支那最初の回教等と稱せらるゝ廣東の懷聖寺の創立者初來の年代及建立年代は不明に屬す。只初唐の頃なることは漠然概定し得らるゝのみ。又清眞寺の名の最初回教寺は長安即西安府に於ける天寶元年(752)勅建のものはなり。とにかく唐永徽二年以來アラビア人即大食國人の遣使入貢は頻繁となるが、そは主として海路廣東北方に上陸したるものゝ如く、乾元

元年(780)には大食波斯兩國人廣州に寇したることさへあり。是等は最初は布教を唯一の目的とせずして通商貿易を第一としたるものなり。即ち回教商人が先驅となりて自然的に回教は傳來したるなり。而して回教商人の入國は海路に先ちて北方陸路よりせるもの更に其年代古さが如くなれども其紀年に至りては明瞭の文獻を缺く。

廣東初來のアラビア回教徒の名 今の廣東懷聖寺の祖師即ち所謂先賢聖舅と尊稱せらるゝ支那最初の回教宣傳者の名は大明一統志卷九には國人撒哈、撒阿的、幹葛思とあり、羊城古鈔には母舅番僧蘇哈白、中西關繫論には母舅賽萊哈、魯哈、魯甘、古士とあり。其撒哈ハ撒阿的幹葛思即ち *Sahala*, *Sa-ati*, *Gan-gos* の字義中 *Sahala* はアラビア語 *Sahab* にして徒、師を意味し、*Sa-ati* は *Saadi* 即ちアラビア人普通の名にあるものとブレトシュナイデル氏 (*Medieval Researches* Vol. I, p. 266) は説く、我回教學者藤田季

莊氏(東亞之光^{第三卷第七號同々}の經典に就て)はサ・ハービー、サアデ、ワツカス、之を羅馬字で書ふ *Sahib Sa'adi* (*bnu Abi*) *Wakās*、サハービーといふ言葉はモハムメットの高弟に對する稱號、サアデ、ワツカスといふは即ち人名、詰り、サハービー、サアデ、ブヌ、アビー、ワツカスといふ字に當ると説けり。ブレトシヌナイデル氏が、ワツカスをガンゴズと讀みたるは、やがて中西關繫論の著者米人林樂知が甘^古士と書きたると相似て共に翰葛思即ワツカスの音譯の相違にして必竟同一人なり。蘇哈白は撒哈八、蘇哈爸と同じく、賽第は撒阿的と同じ。

又之を原名に當て試むるに *Sahabe Walb-Abi-Kabele* にしてそは *Wa-ka-su* 或は *Wang-ka-size* 即ち *Wa-ka-size* (翰葛思) となる。 *Dabry Thiensant* 氏 (*Le Mahoméisme en Chine et dans le Turkestan Oriental* 1878, Vol. I, 33) は説けり。世に廣く行はる Bushell 氏の *Chinese Art* の内には^{第一卷 六八頁} *Saad-ibn-*

abu-Wacous と記せり。而して *Hinly* の有名なる論文 *Die Denkmäler der Kantoner Moschee*^{獨逸東洋學會雜誌千八百十七年には此ワツカスがマホメットの母舅なりとすれば、實錄に合はず、實はマホメットの母 Amina の甥にして、メッカの逃亡者 (Mahāgrin) なり又た Sa'd ibn Wabō の子なるべき筈なること其他詳細なる考證あり。此一項に就ては他日猶詳説する機會あるべし。}

同教々理の系統 支那同回數の教理は其最初傳來の時より既にアラビアの純分子にあらず、大に其經由地たる波斯の回教分子を含むこと多し。而して其教理の標準を一に儒教に採りたる點は、其流行の大原因なり。是れ支那に於ける外國宗教の一般傾向なれども、回教に於て特に其甚しきを見る。天方性理、天方典禮、及清真釋疑補輯等、予か一瞥を経たるものに於て之を實證す。而してかの景教道教に於けるが如く佛教的加味の多からざるも一特色なり。

回教徒の人種系統 支那回教徒の最大多數は漢民族にあらずしてトルコ民族なり。漢民族の古往今來の仇敵たる匈奴の末葉の土耳其民族なり。蓋アラビヤ人が起したる回教はアラビヤ人の權勢を離れて、トルコ人の掌中に歸するに至りて、其利弊の比較はとにかく、一層政治的のものとなれり、アラビヤ人か動もすれば砂漠に退嬰するに對して、トルコ人は出來る丈亞細亞の荒野に羽翼を張りたる其結果は則ち今日の亞細亞の狀態特に支那の狀態となれり。而して漢民族を含むすべての支那人はアラビヤ的といはんよりは寧ろトルコのなり。亞細亞研究のために五十有餘年の長年月其憂き身をやつしたる人として聞えたるバンベリー氏の警句に

“The Turk is a man of religious sentiment only, the Arab is a religious thinker.”

トルコ民族は實に古今歴史界の謎なり、トルコの血の流るゝ支那回教徒の現未來も亦最も難き謎なり。

同じく亞細亞人にしてトルコのならず、從て一度も回教を奉じたる歴史を有せざる吾人日本人は回教研究者として最も興味ある地位を占む。

以下猶、支那回教の 政治的、經濟的、社會的、文化的事項につきて述ふる所あらんとす。(未完)

(明治四十四年九月十一日未定稿)

元朝秘史漢譯年代補考

金井保三

元秘史漢譯の年代につきては、前號に於て既に略其要點を悉せり。然るに今復其補足の必要を感じたるを以て、更に(一)元代の文字と、(二)當時修史の狀況と、(三)泰定即位の詔とを述べて所見を確めんと欲す。

一、元代に行はれたる文字

元の太祖朔漠に崛起し、其俗皆騎射を善くするを以て、遂に大業の基を造りたるは、實に稀有の偉蹟